

「スポーツ学」の探求と「学校スポーツコース」

江刺幸政¹⁾ 古川雅里子¹⁾

Research on “Sportology” and “the Course of School-sport”

Yukimasa ESASHI Mariko FURUKAWA

Abstract

The purpose of this study is to investigate methodology on “sportology” and the characteristic of “the course of school-sport” in Biwako Seikei Sport College.

The word “sport” is used with various meaning. Therefore, at first, we investigate it from the viewpoint of five areas in the movement-culture. Five areas in the movement-culture are “daily movement”, “working movement”, “sport movement”, “expressional movement” and “physical educational movement”.

Second, we investigate it from the viewpoint of individual lifelong sport. We think these two viewpoints will make the methodology in “sportology”.

For constructing “sportology”, it is necessary for us to be strongly conscious of four steps in scientific studies. These steps are “clarification of the subject”, “presentation of hypothesis”, “proof of hypothesis through the experiment” and “official announcement of the result”. Especially, we must carefully examine the step of “clarification of the subject” and “presentation of hypothesis”. Further, it is necessary for us to investigate three levels in the recognition of the “cause and effect relation”. These three levels in the recognition of cause-effect relation are the level of “hypothetical recognition”, “elemental recognition” and “inevitable recognition”.

For research on “sportology” in Biwako Seikei Sport College, we think, it is necessary to have the common understanding about above-mentioned matters and investigate furthermore the system of studies and education.

Key words : sportology, five areas in the movement-culture, four steps in scientific studies, three levels in the recognition of cause-effect relation, methodology of studies

1) 生涯スポーツ学科

1 はじめに

本研究の目的は、びわこ成蹊スポーツ大学における研究の基本的視点としての「スポーツ学」をどのように考えるのかを考察し、そこから筆者らが所属する「学校スポーツコース」における研究・教育のあり方を考えてみることである。

「スポーツ学」という表現は、従来の「体育学」「スポーツ科学」に代わるものとして使用される場合が多いが、内容的には「体育学」「スポーツ科学」とほぼ同義のものと見てよい。ただ、今日の社会的なスポーツの発展・普及という現象の中で、旧来の教育的ニュアンスの強い「体育学」や自然科学的ニュアンスの強い「スポーツ科学」を避け、より幅広くスポーツ現象を対象として研究する領域として、「スポーツ学」という表現が用いられようになったと考えてよいだろう。こうした事情は、インターネットで「スポーツ学」を検索してみれば一目瞭然であり、「体育学」「スポーツ科学」とほとんど同義に使用されているのである。それ故、「スポーツ学とは何か」について正面から問うているものはほとんどないと言ってよい。しかし、このことは又、同時に、「スポーツ学」という表現が意味するものの曖昧さをも意味しているのである。本研究はこのような状況の下で、「スポーツ学」という学問が意味する中身について若干の考察を加え、「スポーツ学」への探求の一里塚としたいと考えるものである。

「スポーツ学」という学問領域が成立するか否かという問題を考える場合、大きく二つの問題が指摘できる。一つは「研究対象」としてのスポーツ現象の多義性である。今日、スポーツという用語はそれが人間の身体活動に限定されるときも、様々な運動現象に対し用いられ、それを語る人の数ほどその意味が多義的であるという問題である。ここから、研究対象の曖昧さという問題が浮き彫りにさ

れる。二つ目は、「研究方法論」の独自性・自立性を巡る問題である。すでに述べているようにスポーツを研究対象として研究する研究領域と研究方法は実に多様である。スポーツは「体育学研究」あるいは又「スポーツ科学」として、多様な研究方法を駆使して研究され続けているのである。スポーツは体育学に包括される諸科学の研究対象として、いわば実践に関わる学あるいは多様な目的に奉仕する技術学の対象として、多様な研究領域と研究方法を通して研究されつつあるのである。このような状況下で、「スポーツ学」が独立した一つの学問領域として成立するための固有の「研究方法論」はなにか。これが二つ目の問題である。

本研究は、これら二つの問題に対し、その考え方を提案したいと考える。そして、そうした提案から再度、学校スポーツを巡る研究・教育のあり方を考えてみたいと思う。

2 人間の運動としての「運動文化」の考え方と「スポーツ学」の研究 方法論

「人間の運動」行為や活動を考える場合、それは「他の動物の運動」と区別する意味において、まず「合目的性」と「経済性」が問われる。合目的性と経済性は「人間の運動」を考える場合の質と量を表現しているのである。逆に言えば、人間の運動の質的吟味はその目的性によって、又その量的吟味は経済性において表現されるのである。それらは又、人間の運動が、運動に対する価値観（目的性）と技術観（経済性）によって捉えられると言い換えることが出来る。

同時に、人間が歴史的・社会的存在であるという側面から理解されるとき、この合目的性と経済性（価値観と技術観）は「歴史的・社会的な文化領域」として生成することになる。というのも、「人間的なもの」はその程度に差はあれ「全て文化的なもの」である。そして人間的なものは更にその目的性の程

度、範囲において区別され、より具体的な文化領域として追求される。このような理解あるいは視点を身体運動に即して言えば、私たちの身体運動は歴史的・社会的な「運動文化領域」を介して把握されることになる。衣・食・住に関わる、あるいは労働や日常生活に関わるあらゆる人間的運動が、「運動文化」を構成するものとして位置づけられるのである。(図-1)は、そのような運動文化に対する(筆者らの考える)五つの運動文化の領域を示すものである。

2-1 「運動文化」の五領域

作業運動	(職業労働に伴う運動群)
日常的運動	(衣・食・住に伴う運動や、余暇に行う運動群)
スポーツ運動	(スポーツ競技として行われる運動群)
表現運動	(バレエや様々な舞踊などの運動群)
体育的運動	(若い世代のための教育内容として創造されてきた運動群)

図-1 運動文化の五つの領域

五つの運動領域は、総体としての人間の運動追求過程が目的や価値観によって相対的に自立化したものである。その自立化した運動追求過程が社会的に永続的で決定的であるためには、各々の領域における専門的労働の成立が不可欠の条件になる。各々の領域における専門家の発生と増加、社会的運営組織の成立、あるいはそれらにおける多様な機能を担う役員の専門化などが要請され確立する。身体運動に対する社会的な追求は、ますます広く深く拡大されていくそうした専門家による専門的労働を介して追求されるものとなっている。それぞれの領域における専門的な運動追求を労働生産物における生産と消費の関係から見ると、それぞれの領域で運動を専門的に追求する人(生産者)とそれを受け取る人(消費者)の関係として捉えることが出来る。日常的運動に即して言えば、衣・食・住に関

するあらゆる労働(生産物)が、一般の人々の日常的な身体運動を規定する。「より便利な」道具や用具の生産は、消費者の側に、より簡便で・疲労しない・使いやすさという日常運動の特徴の一つを作り出すのである。同様に又、スポーツ運動の専門家(スポーツ労働ともいうべき「見る価値のあるゲーム」の創出としてのプロスポーツやそれを可能にし、準備する多くの関係者、そしてゲームの場を取り巻くスポーツ関連商品の製造・販売に関わる労働、「スポーツ映像」を中心的な情報として提供するマスメディアの関係者等々)は見るもの、使用するものとしての「作品あるいは演技、嗜好品等」を生産するのである。

2-2 「運動文化」の五領域の性格

この五領域はそれぞれ共通の価値観に支えられた運動群を表示している。それらは、人々が運動を行うときの目的の合理性や運動の経済性を包括する価値観の違いを表示する運動群である。走・跳・投等の動作あるいはバレーボール、サッカーなどといわれる運動も、運動の名称としては同じように呼ばれても、現実の運動実施状況としてこの五領域を通して理解される時、それぞれに異なる意味づけや異なる評価を与えられ、その後の運動追求も異なったものになる。当然のことではあるが、そこでの運動の技術的な過程も異なるのである。

簡単に各運動群における基本的な価値観や技術観について述べてみよう。スポーツ運動とは、一定の共通したルールに基づく「競技」での勝敗を基本的な形式とし、長いトレーニングを暗黙の前提とする記録や技術の絶え間ない追求と向上が、その運動追求の中核にある。同様に又、表現運動においても職業的舞踏家に代表される厳しいトレーニングと表現技術の追求がその価値観や技術観の中核にある。それは、身体運動を通して「いつでも」感情や感動を表現し得る技術の追求なのであ

る。

作業運動は労働過程における身体運動を表現するものであるが、その基本的な性格として、一方における複雑で熟練を要する身体運動の排除…より厳密に言えば、人間の身体運動につきまとう持久的な不正確性や不安定性の排除…と部分的な身体操作化や動作の単純化、他方における専門的職業としての技能的熟練の追求という二つの傾向性を持っている。これら二つの傾向が矛盾しつつも同時に追求される。労働過程の発展とともに、特定の技能的熟練を必要とする職種を除いて、作業運動的な熟練性は可能な限り排除され、特殊な道具の開発や自動機械装置に取って代わるという傾向を常に持っている。こうした大規模な道具や装置あるいは自動機械装置の開発は、人類の長い労働の歴史から見れば極々近年に始まり、次第に加速化しつつある新たな傾向といえる。

日常的運動は衣・食・住に関係する日常的な運動や生活用具の使用に伴う運動群と、余暇やレジャーに伴う運動群の二群からなる。前者においては疲労の残らないような単純な部分操作化が、後者においては心理的な楽しさや生理的な補強などを目的とした運動が追求される。労働過程の機械化に伴う全身的な大筋活動の排除と身体運動の部分的な操作化、座作業による精神的労働の拡大につれ、後者の身体運動能力や運動器官の機能の保持のための活動が不可欠になる。このような意味で、今日、日常的運動に含まれるレジャーとしての運動群は、身体の維持発達のための方法として、より一層その重要性を増しつつある。

体育的運動とは、歴史的に見て、若い世代に対する身体的・運動能力的準備のために、一定の教育制度の下で追求され発展させられてきた運動群を表現するものである。この体育的運動は基本的に二つの課題の下で追求されてきた。一つは人類の運動追求の成果を学びつつ、更にそれらを発展させる条件や能力あるいは知識を身につけさせるという課題で

ある。こうした課題の下で発達させられる能力は将来の日常的運動や作業運動の準備となる。他の一つは当該の社会的諸条件の下での学校期における身体的・運動能力的発達を一般的に保証するという課題である。この課題は学校期に属する青少年達の日常的運動と深い関わりを持ち、学校期における身体活動の在り方を規定する。

五つの運動追求領域における価値的・技術的 pursuit の性格は、各々の組織的領域内では各々に固有の価値基準を形成している。それぞれが固有の価値・技術の体系を持ち、身体運動に関する知識・手段や規則の体系性を持つが故に、相対的に自立した個別の体系と見なされねばならない。

五領域を破線で二つに区分することの意味は、上の四つの運動群がそれ自体「実業」として、つまり「現実的な運動能力」の生産と消費として問題にされるのに対し、体育的運動はそれらに対する予備的・準備的な能力として、又、国家や学校などによって「予定された能力」として、特殊な位置に置かれることを表現している。ここで述べた「実業としての能力」と学校教育で獲得される「準備的な能力」の関係は、社会的な労働や文化と学校教育の関係と同じ文脈で理解されるものである。理科や社会科が現実的な労働能力、たとえば工業労働や農業労働の実践的な力を養成するのではなく、そのための準備的な能力として自然科学的認識能力や社会科学認識能力の形成を目的にするように、体育的運動も又「四つの運動領域に対する認識能力」を形成するために存在すると考えるのである。現実的な作業運動能力やスポーツ運動能力というものは、実業として多様であるとともに現実的な力量が直接的に問われるものである。体育科教育でそれらを養成することは不可能であるし、又必要ではない。体育は、それらに対する見方や考え方としての認識能力の形成を課題としていると考えるべきなのである。問題は、体育で形成する認識能力が他

教科の認識対象や認識方法とどのように異なるのかという点への理解，あるいは，「身体運動を媒介とした認識」という認識方法の特殊性への理解に関わっているのである。

2-3 体育的運動の基本的性格

(図-2)は四つの運動群と体育的運動の対応関係を表現したものである。体育の運動領域として再編成される場合，問題になるのは，自立した運動文化領域として持っていた価値体系と体育的運動の価値体系の関係である。特に，体育の一領域としてのスポーツでは，図に示されるように，「日常的運動」における余暇活動としての運動（レジャーやレクリエーションとしてのスポーツ）と競技スポーツとしての「スポーツ運動」の両者に対応する。ここでは三者の統一と分離が問題になる。

「スポーツ」という用語は，(図-2)の中では，まず三つの領域に関係して理解されねばならない。五つの運動文化領域の一つとしての「スポーツ運動」は，一般に競技スポーツとして知られる価値体系に包括される領域である。それは，一定の「競技ルール」を認め，その下での勝利を唯一の価値基準とする人々によってなされる運動群である。そこでは身体資質（たとえば，身長や体重，あるいは運動能力など）の違いを無視しても1位，2位，3位の違いを明確にし，更にそれを「金，銀，銅」等の価値の差として認めるような価値体系が生きているのである。そこには，それらを認めたくなければ競技に参加し

なければよいという前提がある。競技スポーツにおける「公平」「平等」も，競技ルールを認めて参加した後に成立するのであり，競技ルールそのものの公平さや平等さを意味しているわけではない。背の低い人々がバレーボールをしたくて自分達にあったネットの高さを要求することは，競技スポーツとは関係のないことなのである。

又，日常的運動を形作る二つの領域の一つとしての「余暇活動的運動群」に含まれる「スポーツ」は，レジャーやレクリエーションとして行われる運動群であり，日常的運動としての価値体系を前提としている。それは，労働力の再生産の機能を果たすものとして，又，精神的・肉体的疲労の回復や休息を前提とする価値体系の下にある。そこには，競技スポーツでは絶対的に必要とされるルールの厳密さや勝負や勝利に対する態度，過度な練習などは否定されざるをえないのである。

更に，体育的運動におけるスポーツは，あくまで体育的価値体系の下にあり，体育目標達成のために変形されるものとして位置づく。それらは「体育的スポーツ運動」ともいうべき運動群であり，競技スポーツとは異なる価値観と諸条件の下で行われる運動群である。特に，全ての児童・生徒に対する義務教育の内容としてスポーツが取り扱われる時，運動者に合致するルールの工夫などの運動実施条件の変更，運動の目的や勝負や練習（トレーニング）への態度などは，競技スポーツと決定的に異なったものとならざるを得ない。

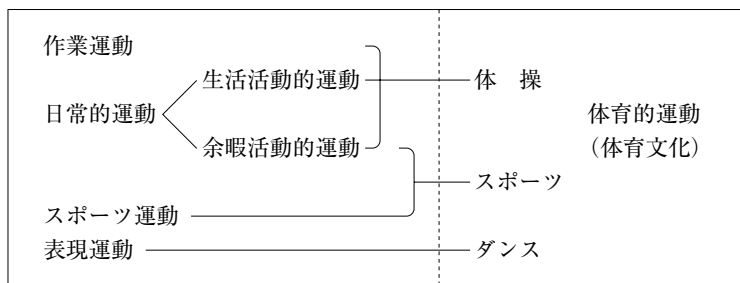


図-2 運動文化内部における体育的運動とその他の運動との関係

2-4 スポーツ学の研究方法論（I）

スポーツ研究における研究対象を巡る最大の問題は、「スポーツ」といわれる運動がいくつもの運動文化の領域にまたがっていることを述べてきた。言い換えれば、スポーツは多様な価値観（体系）のもとで理解され、したがって又、異なる技術的・追求の過程のもとで理解されねばならないという点である。こうした研究対象の多義性という事態は、「スポーツ学」研究の基本的な性格を規定することになる。つまり、「スポーツ学」とは「スポーツを巡る価値体系（と技術体系）およびその相互の関係を研究する学問」であるという点である。スポーツに関わる各運動文化領域の「内的な個々の価値体系および技術体系に関する知見」は、これまで積み重ねられてきた体育学や諸スポーツ科学によって説明が可能である。しかし、それらの諸科学部門がどのように関連しているのか、又、スポーツを巡る様々な問題事態における価値体系の衝突をどのように解消するのかを、「スポーツ学」は直接に研究対象とするのである。このような視点の転換こそ、体育学からスポーツ学へのパラダイムの転換だと考えるのである。

「スポーツ学」を「スポーツを巡る価値体系（と技術体系）およびその相互の関係を研究する学問」と捉えるとき、その研究方法論はどのように考えられるのであろうか。振り返って、スポーツに対する価値観の違いとは、運動行為の目的の違いから生じるものであった。それ故、具体的な「目的の確定」が基本的な出発点になる。これまでの体育学研究に一般的に見られる細分化された研究領域とそこで「研究方法から研究テーマを選択する」のではなく、「スポーツ」に関わる諸問題に密着した「研究課題や研究目的から研究方法を選択する」という転換が必要になる。このような研究課題や目的の確定の後、その総合的な構造（下位目標の全体的な構造）に応じた、より下位の研究課題とそれに対応した研

究方法が選択・決定され、そうした個々の研究方法によって明らかにされた結果が全体の研究目的に再統合され（フィードバックされつつ再統合され）ていくという過程をたどることになる。これが「スポーツ学」における基本的な研究方法論（個々の研究方法の体系）になる。それは、「スポーツ」の様々な問題を直接的に研究テーマとする（プロジェクト型の実践的研究をいつでも可能にする）研究方法論の構築を目指すことになると考えられる。このような考察から導き出されるのは、こうした構想を実現するために、（五つの運動文化領域の区別を基準にした）各運動文化領域ごとの生成・発展の姿、特に、各領域における専門家の成立や専門労働の成立過程（とりわけ、科学的労働とも言われる個別科学の研究者の位置づけと役割）の解明が必要になるとともに、それらの運動文化領域間の関係が、スポーツを視点として問われねばならないということである。このことを意味している。つまり、各運動領域は、それ自体自立した運動への人間的取り組みとして存在している。それらは他の運動領域と関わりを持たなくても社会的に存在し続ける。しかし、「スポーツ学」という立場からスポーツ現象として総合的・相互関連的に把握されるとき、人間の身体運動への一層の追求が可能になり、各運動領域がより豊かなものとして再認識され再構築されることになるということである。

「スポーツ学」と「体育学ないしスポーツ科学」の違いは、上に述べたように、それがどのような専門的労働として成立しているのか、あるいは成立していくのかという視点からも分析される。「体育学ないしスポーツ科学」は体育的運動の領域における必要性から専門的労働として成立したものである……特に、第二次大戦後、体育科教育の内容や教材としてスポーツが位置づけられたこと、そのため大量の体育教師の養成が大学において必要になったことと合わせ、全ての大学にお

いて「一般的教養としてのスポーツの理論と実践」が位置づけられたこと。及び、それに伴う大学でのスポーツ研究の必要性の生起、体育・スポーツの専門家の増大と学会の成立をはじめとした研究の集積等の結果として「体育学ないしスポーツ科学」が拡大してきたという事情などである。これに対し、「スポーツ学」の研究は、これまで述べてきたように、日常的運動、スポーツ運動、体育的運動の三領域にまたがるスポーツ現象およびそこでの個々の専門的労働、特に（科学的）研究労働を基盤として、そしてそれらの関連の学として成立するのである。主として体育的運動を対象とするという狭い運動文化領域からいったん離れ、より広い運動文化領域間の関連としてスポーツを対象に研究する学問が「スポーツ学」だといってよい。

2-5 「スポーツ学」における因果関係の捉え方

「スポーツ学」における総合的・相互関連的な理解について、以下のことが前提となる。スポーツといわれる現象は無数の、又複合的な事実の集合体であるが、「体育学ないしスポーツ科学」はそれらの事実を関係諸科学の方法によって様々な視点から切り取り明らかにしてきた。これに対し、「スポーツ学」は現実としてのスポーツ現象やスポーツ的行為の複合的性格を、全体として捉え明らかにしようとする。その際、事実に関する認識論として①「仮說的」原因－結果関係認識、②「要素的」原因－結果関係認識、③「因果的」

原因－結果関係認識という認識の段階を考慮する必要がある。それは、事実に対する私達の原因－結果関係認識が、仮說的な認識レベルの知識から、（全体の一部を構成する）要素的な事実を確認するレベルの知識、そして全体的事実が因果的・必然的なものとして説明できるレベルの知識まで、多様なレベルの知識によって構成されていることを宣言するのである。現実の実践とはそうした無数の認識レベルの集合体を背景として成り立っていることを前提とするのである。したがって又、「スポーツ科学」で言う因果的關係や法則性を①～③の認識レベルに対応させることを要求する。「スポーツ学」は未だ①や②の段階にしか位置付かない知識や認識レベルを確認し、スポーツ現象を明らかにする方法として用いるのである。（図-3）はそうした原因－結果関係認識と目的－手段関係認識の対応を表現したものである。

筆者らは「科学的」研究について、その内容と性格を要約して以下のように考える。科学的認識過程とは、「解決すべき未知の問題の明示」「仮説（＝最も可能な解決法）の定立」「実験（＝仮説の真偽の確認）」「結果の公表」という四つの過程からなる認識であり、そうした一連の過程から導き出された知識や法則の体系と考える。このような考え方に立てば、「対象を数量的（定量的）に扱うことが科学的方法である」とは考えない。それは、「目の前で見ていること」を何らかの手段によって「数量的に記録すること」をもって科

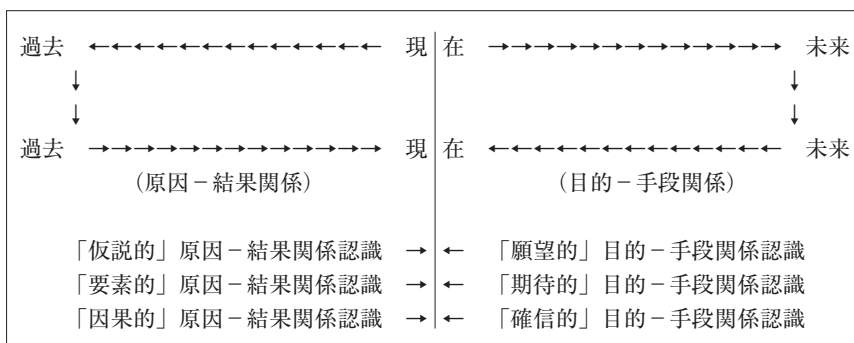


図-3 原因－結果関係認識と目的－手段関係認識の対応関係

学的であるとは言えないのと同じである。それらは、様々なデータの処理や利用の問題の違いはあるにせよ現実を確認する同様の方法だと考えるからである。数量的に提示される事実に対しては、それが問題を明示するための、あるいは、仮説構成のための「調査」であるのか、それとも「仮説の根拠」を示すものであるのか、又、仮説の真偽に関わる「実験」結果であるのかを問う。「何が問題であるのか」、それに対して「どのような仮説（最も可能な解決法あるいは最も正しいと考えられる考え方）が成立するのか」、そして「その仮説の真偽を実験によって確認する」と言う過程は、科学的研究の根幹をなす思考（論理的）回路だと考えるのである。

（図-3）の「仮説的」原因-結果関係認識とは、そうした考えをベースにして規定される認識レベルを表している。「要素的」原因-結果関係認識とは、ある事象に対する認識内容が必要条件ではあるが、それだけでは全体が説明が出来ない（必要条件ではあるが十分条件ではない）ような認識レベルを表現している。それは明らかにすべき全体に対してその一部を認識できているという意味において「要素」を明らかにしているのであり、「要素的」原因-結果関係認識と呼ばれるべきレベルの認識である。「因果的」原因-結果関係認識とは、明らかにすべき全体とその部分とその全体構造として明確に確定され、必然性や再現性を確認できる段階の認識である。

（図-3）における右側の（目的-手段関係）は、一定の未来において実現したい事態である「目的」と、そのための手段の関係を表している。（目的-手段関係）は（原因-結果関係）の認識レベルに対応した認識であり、「願望的」「期待的」「確信的」の三つのレベルとして示されている。（図-3）が意味しているものは、因果関係の解明あるいは法則性や規則性の解明として理解される「科学的研究」がいろいろなレベルを持っている

こと、そして未来において実現されるものとしての「目的」についても、その実現の可能性においていろいろなレベルを持っていることを示している点である。事象の数量的把握も、それが問題を明らかにするための「調査」なのか、「仮説の構成の手段」なのか、仮説の真偽を確認する「実験」なのかを明らかにすることを求めているのである。又、「目的の定立」についても、それがどのような過去の（あるいは事実の）原因-結果関係を基にして言われるのかを明らかにすることを要求する。その目的は「願望的」「期待的」「確信的」のどのレベルに対応しているのかの吟味を要求するのである。

「スポーツ学」とは、スポーツといわれる現象について科学的に探求する学問である。「科学的に探求する」為には、スポーツを巡る様々な現象に対しその認識レベルを確認しつつ、問題事態を研究する体制が必要になると考えるのである。

3 個人的行為における文化的価値の衝突と「スポーツ学」の研究方法論（Ⅱ）

前項では歴史的・社会的な運動追求と五つの運動文化領域およびそれらへの研究方法論を考えてきた。それはスポーツという用語とその内容を理解するために必要な視点であり、人間の身体運動を規定し、方向づける価値体系と技術体系に関係するものであった。本項では、そうした歴史的・社会的運動追求の現実的な現れ方としての、個々の個人における運動追求の過程を検討してみたい。前項での検討を運動文化に関する巨視的研究方法論（対象とする現象の「全体的な規則性や法則性」を研究する方法論）への要請とすれば、本項での検討は運動文化に関する微視的研究方法論（対象とする諸現象を構成する「一定の要素の振る舞いの規則性や法則性から」全体的な現象を説明する研究方法論）ということが出来る。前者は主として、人間の系統発

生史的な運動追求の姿を、後者は個体発生の史的な運動追求の姿を研究するものといえよう。スポーツ学はこうした二つの基本的な研究方法論をスポーツという現象に適用し、そこでの未知の問題に対する解決法を提案する学問ともいえよう。

3-1 日常的運動行動系列と価値観の衝突

個々人の日常的な運動行為を運動行動の時系列として考えてみると、衣・食・住に関わる日常的運動、様々な労働として捉えられる作業運動、レジャーやレクリエーションとして捉えられる余暇活動などが一定の時系列上の運動行為として捉えられる。児童・生徒の場合、学校での学習活動や部活動などがこれに加わることになる。このように考えると、「スポーツ」といわれる運動活動は、個々人の運動行為系列で考えれば、「余暇活動的日常的運動」や学校における「体育的運動」として、あるいは部活としての「(競技)スポーツ運動」等の、異なる価値体系に属する運動群の間を行き来することになる。そして、私たちはこれらの運動群の違い(価値体系・技術体系の違い)を無意識に使い分けていることになる。こうした運動群の違い(価値体系・技術体系の違い)が顕在化するのには、「余暇活動的日常的運動」の場合を例にとると、自らが「するスポーツ」としての簡単な運動と観戦行動としての「見るスポーツ」のギャップを意識するときであったり、余暇活動としてスポーツを行う際に生じることの多い「楽しむものとしてのスポーツ」と「勝敗を争うものとしての競技スポーツ」の価値体系の衝突であったりする。又、学校での「体育的運動」としての運動群に競技スポーツの価値体系や技術体系が持ち込まれ衝突する場合である。あるいは、運動部活動としての「(競技)スポーツ運動」の追求において様々な立場や考え方が持ちこまれ部活の目的が論争的になったりする場合である。こうした日常的な運動行為の時系列上の衝突は、それ

が日常的運動としての価値観に包摂されている限り、つまり、労働力の再生産としての活動であったり、疲労の残らない軽度な運動活動という性格を保持している限り、意識されることは少ない。しかし、日常的な運動行為の時系列上のある運動活動が、日常的運動の価値体系の範囲を超え追求されるようになるとそれぞれの運動群が持つ価値観や技術観が衝突し、その衝突の事実や内容が顕在化し、意識化されることになるのである。

3-2 個体発生における運動追求

(図-4)は個体発生史における運動領域の関係を示すものであり、横軸に個体発生における時系列を、縦軸に各々の時点における他の運動領域との関係を図示している。

これらの各運動領域間の関係を、各時期を基準に考えてみると、(図-4)のようになる。この図を基に検討したいのは以下のような内容であるが、特に①②についてもう少し考えてみたい。

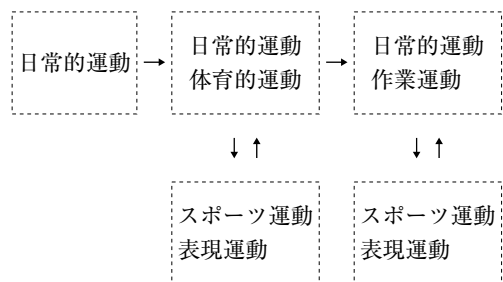


図-4 個体発生史における運動追求

- ①一生の各期における日常的運動の性格
- ②学校に通う時期における運動生活
 - 日常的運動と体育的運動の関係
 - 体育的運動とその他の運動領域の関係
- ③学校卒業後の運動生活の特徴

3-3 日常的運動とスポーツの機能

今日の身体と運動能力をめぐる最大の問題は、労働過程の機械化や単調化や特殊化、又、座作業を伴う精密作業化や精神作業化、あるいは日常的な運動の簡便化や運動不足による

肥満などである。同時に、マスコミによって大量に流されるスポーツや芸能情報による過度の欲求増と未充足への不満状態や不健康への意識などである。こうした健康と運動能力の維持・向上に対する要求は、今日、日常的運動の余暇活動への関心になってあふれ始めている。競技スポーツと区別される「ニュースポーツ」の隆盛や野外スポーツへの関心・参加の拡大なども人々の自己防衛の表現でもある。確かに、競技スポーツや表現運動のすばらしさは人々に人間の運動能力のすばらしさと人間的可能性の豊かさを教えてくれる。しかし、それは見ることによって得られる可能性であって、それらを自らのものとして行い獲得する条件は、日常的運動、とりわけ余暇活動をどのように作り上げるのかということの中にしかないのである。言い換えれば、人類の歴史的成果としての作業運動・スポーツ運動・表現運動は、日常的運動（その中の余暇活動）において再編成されることを通してのみ利用可能なものになるということである。

生存活動そのものともいえる日常的運動は、一生という時系列で考えてみると、極めて大きな位置を占めていることが分かる。乳幼児期における身体運動、学校期における体育的運動との関わり、成人期以降の作業運動との関わり、老人期における日常的運動などそれぞれの時期における身体運動との関わり方がその人の人生あるいは運動生活を方向づけているとも言えよう。「スポーツ学」が明らかにしなければならない課題の一つは、こうした各期におけるスポーツの機能である。その際、（競技スポーツとして展開される）スポーツ運動は、その価値体系から切り離され、「運動の仕方」として日常的運動に取り込まれ、いろいろな機能を果たす。それらは楽しい遊びであったり、健康のための手段であったり、仲間との憩いの活動であったりする。その際、繰り返し述べることになるが、それらは日常的運動という価値体系のもと

で、そうした目的の手段として機能することになるのである。日常的運動における「するものとしてのスポーツ」はそのような機能を担うのである。（競技）スポーツは「観戦するものとしてのスポーツ」として存在し、見る楽しみを保証する。表現運動も同様の機能を果たしている。日常的運動に入り込んでくる「スポーツ的な運動方法」は更に多様な課題の下で変形され、「するものとして、又見るものとして」展開されているのである。それらは「様々な健康体操」であったり、「芸能人による運動大会」であったりする。ここにおいて、スポーツは「見せるものとして展開される（競技者による）スポーツ」「観戦行動対象としてのスポーツ」「体育的運動の内容としてのスポーツ」「レジャーを中心とする日常的運動としてのスポーツ」等に分裂する。

3-4 学校期における運動生活とスポーツ

我が国における生活の向上は、もはや青少年を現実的な労働力として予定していない。青少年の運動生活は、彼らの生活の中心部分を占める学校教育における活動、特に体育的運動を中核として構成されることになる。それは、体育的運動と日常的運動、体育的運動と部活（競技スポーツ）等として考えられることになる。

青少年期における運動生活の最大の特徴は、この期における日常的運動に、（競技）スポーツの萌芽（準備）としての運動活動が加わることである。「運動部」活動あるいは各スポーツ団体による早期トレーニング・英才教育ともいうべきジュニア対策が参加してくることである。日常的運動としての「見るスポーツ」や「レジャーとして行う簡単なスポーツ」「体育的運動としてのスポーツ」「運動部活動あるいは学校外での専門的競技スポーツ」が同時的に存在することになる。青少年期、あるいは学校期におけるスポーツは運動文化の価値体系が否応なしにぶつかり合

い、融合し合う特殊な時期でもある。

学校期における運動生活が多様化する原因は、それが日常的運動の価値体系に収まらない程エネルギーを持っていることから生じる。これまで既に幾度となく述べてきたが、日常的運動の特徴は、衣・食・住に関わる生活活動的な運動や、疲労回復・補強運動などの労働力の再生産としての活動であったり、レジャーやレクリエーションなどの疲労の残らない軽度な運動活動であった。発達期でもある学校期の青少年達のエネルギーはこうした日常的運動の価値体系の範囲を超え、より強い運動負荷や複雑な運動能力の獲得に向かうのである。様々な運動部活動や、青少年に特徴的な新しい運動への関心が多様な運動活動を生み出すのである。しかし、そこには、彼らの運動生活から見た時、ごく軽い負荷の日常的運動しか行わない若者と、(競技)スポーツ運動として極限の負荷を求める若者までの大きなギャップが存在する。こうした学校期における運動生活の特徴は、学校期以後の社会人としての運動生活と比較してみれば特徴的である。社会人としての運動生活は、就労という事情から、基本的に作業運動と日常的運動から構成されざるを得ないのである。

「スポーツ学」における第二の研究方法論…個体発生史におけるスポーツ現象の研究の焦点は、このような学校期にみられる「日常的運動」「スポーツ運動」「体育的運動」の相互関係の解明を中心としつつ展開される。それは人生において最も運動能力の発達が急激

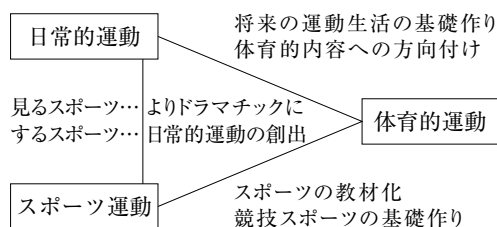


図-5 「スポーツ学」における三つの運動領域の相互関係

であるとともに、大多数の人々にとって身体運動が最も長く集中的に追求される時期であるからであり、スポーツに関わる価値観が最も矛盾した形で衝突する時期であるからである。(図-5)は、スポーツ現象に関わる三つの運動文化領域間の相互関係を表示している。

生涯の各時期における運動文化領域間の相互関係とそこで生じる様々な軋轢や解決すべき問題、これらがスポーツという現象を通してとらえられる時、それらがスポーツ学の研究対象や研究方法となり、第二の研究方法論を構成する。

4 「スポーツ学」の探求と「学校スポーツコース」…びわこ成蹊スポーツ大学における 研究・教育体制と「スポーツ学」への取り組み

① 「スポーツ学」の研究体制と大学における学部・学科・コースの区分は必ずしも一致しない。後者は研究・教育の合理的な進め方を背景として便宜的に区分されるものと考えべきものである。問題となるとすれば、各学科やコースがどのような視点からスポーツ学に接近していくのかという点である。この点について考えてみたい。

本学における「生涯スポーツ」と「競技スポーツ」という学科区分についてであるが、前者は、生涯における運動生活をスポーツという視点から研究・教育するものである。この視点によって、研究対象としてのスポーツの全体像が表現されている。後者は、人間の運動能力の開発・解明が(競技)スポーツ運動として集中的に行われること、そしてスポーツを中心とした研究において、五つの運動文化領域の中で最も集中的に研究されるべき領域であることを表現している。

「生涯スポーツ学科」は「野外スポーツ」、 「地域スポーツ」、 「学校スポーツ」の三コースから編成されているが、筆者らはこの学科の中心が「地域スポーツ」コースであると考

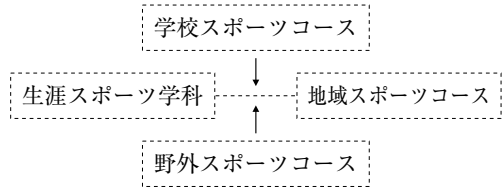
えている。又、「競技スポーツ学科」は現在「トレーニング・健康」「コーチング」「スポーツビジネス」「スポーツ情報戦略」の四コースから編成されているが、筆者らはその中心が「トレーニング・健康」と「コーチング」の両コースだと考えている。これらについては、以下で補足したい。

② 一生を時間的な経過とともに理解すれば、人生の時間軸に沿った各期ということになる。こうした人生のある時期を切り取り生活空間として眺めると、生活空間としての地域は各年代の人々の集まり、つまり各年代の人々が同時に生活する水平的な広がりのある空間と考えることが出来る。このような考え方に立つと、生涯スポーツと地域スポーツは視点を変えた一生におけるスポーツのとらえ方ということが出来る。それは又、人生の各期における「日常的運動の有り様」をスポーツという視点から捉えることに他ならない。これが生涯にわたる日常的運動を地域スポーツと結びつけて考える視点である。各地域に存在する各年齢期に対応した運動空間と運動組織こそ日常的運動を保証するものである。特にその中核的部分をなす学校や、近隣に存在する野外スポーツ施設およびそれらを利用した運動活動は、地域スポーツを豊かなものとして支えるものとなる。

繰り返しになるが、スポーツ学の研究体制と大学における学部・学科・コースの区分は必ずしも一致しない。後者は大学の現実的な経営を反映するのであり、スポーツ学の構築はいわば新しく創造されるものとして構想されるものであるからである。そのような理解を前提として、現在という時点での本学の体制と「スポーツ学」の探求を考えてみたい。

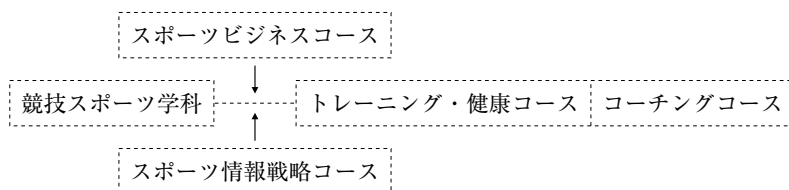
「学校スポーツコース」は、直接的には保健体育科教育の研究・教育、教員免許関係科目の授業に関わっている。スポーツ学の構築に関しては、「体育的運動」の研究、特にスポーツ教材の取り扱いに関する研究を通し

て、またこれまで既に述べてきた他の運動文化領域との相互依存関係の研究を通して貢献する研究領域であり、生涯スポーツや地域スポーツにおける「教育機能」の中心的位置を占めている。



「野外スポーツコース」は地域スポーツにおける特別な教育機能を果たす領域である。一定の空間的広がりとして理解される地域にあって、それらと密接な関係を持つ特別な自然環境においてなされる野外でのスポーツ活動を、教育的視点からサポートする研究領域である。

③ 競技スポーツとして理解されるスポーツ運動は、その技術的側面から眺める場合、一般的にスポーツとして理解される全ての運動の中核にある。なぜならば、スポーツ運動は人間の運動能力のあらゆる側面や要素、内容を追求するからであり、練習方法の体系として人間のあらゆる運動能力形成の方法を包含しているからである。それらは、実に単純な原理としての「競技に勝利する」ために、人間のあらゆる能力を動員し、利用しようとすることから生じるのである。それは、(限界づけられていないという意味における)無限の可能性(運動能力開発の可能性)を持っている。具体的には、競技スポーツにおける「練習あるいはトレーニング」は、運動能力を発揮したり、向上させるための諸条件を明らかにする。それらの運動能力向上のための「練習の場・手段」や「運動実施上の約束事」の構築を通して、運動能力開発の体系を作り出していくのである。他の運動文化領域は、スポーツ運動のこうした技術的特性を利用し、スポーツの技術体系(練習やトレーニン



グの体系)をいったんその価値体系から切り離し、自らの価値体系にスポーツという「運動の仕方」を取り入れるのである。

「競技スポーツ学科」の中心的な研究・教育領域は「トレーニング・健康コース」「コーチングコース」であり、それらを補完する研究・教育領域として「スポーツビジネスコース」「スポーツ情報戦略コース」が位置づけられる。後者の二領域はスポーツ運動と日常的運動の相互関係、あるいは現代における競技スポーツを理解し研究するための重要な研究領域である。

④ 学校スポーツコースの研究・教育の課題は、「学校期」に特徴的な四つの価値体系の衝突、つまり学校期における日常的運動（観戦行動の対象としてのスポーツ、レジャーの内容として行うスポーツ）、体育的運動としてのスポーツ、運動部活動としての競技スポーツ及び将来の労働としての作業運動への準備という、価値体系や技術体系の衝突と解決の方法を、体育的運動を中核として研究・教育することにあるといえる。

筆者らは体育的運動の性格についてこれまで次のように述べてきた。

「体育的運動とは、歴史的に見て、若い世代に対する身体的・運動能力的準備のために、一定の教育制度の下で追求され発展させられてきた運動群を表現するものである。この体育的運動は基本的に二つの課題の下で追求されてきた。一つは人類の運動追求の成果を学びつつ、更にそれらを発展させる条件や能力あるいは知識を身につけさせるという課題である。こうした課題の下で発達させられる能力は将来の日常的運動や作業運動の準備

となる。他の一つは当該の社会的諸条件の下での学校期における身体的・運動能力的発達を一般的に保証するという課題である。この課題は学校期に属する青少年達の日常的運動と深い関わりを持ち、学校期における身体活動の在り方を規定する。」

また、次のようにも述べてきた。「体育は、それらに対する（四つの運動文化領域に対する）見方や考え方としての認識能力の形成を課題としていると考えるべきなのである」と。これらの見解は、「体育的運動」を内容とする研究・教育のあり方から言えば、学校スポーツコースが持つべき必要条件の提示である。それ故、それらの内実としての（十分条件としての）考察が必要であるが、その内容の提示については別の機会に譲りたい。

⑤ 以上の考察によれば、本学の学科・コースの体制は、「スポーツ学」構築に向けた体制としてはスポーツ現象を全体的に対象とする研究体制という意味において、その基礎的条件を満たしていると考えられる。ただこのように言えるのは、運動文化の五領域を前提とし、それらの相互関係をスポーツを媒介として理解するからである。それ故、運動文化そのものに対する共通理解と、スポーツを切り口とした運動文化領域相互間の関係への追求が不可欠となる。現象としての様々な「スポーツ的行為」ではなく、それらを規定している価値観や技術観にまでさかのぼって検討することが必要である。それらを通して初めて、それぞれの運動文化領域におけるスポーツ的行為がどのように発展していくのか、又、価値観の衝突がどのように解決できるのかが示されると考えられる。

⑥ 最後に、本学における課題を、「スポーツ学」の研究方法論への探求という視点から、本論文のまとめとして述べてみたい。

「スポーツ学」とは、スポーツといわれる現象について科学的に探求する学問である。同時に、「スポーツ学」が構想されるということは、未だその研究方法論が未確立であることを意味している。考えておかねばならないことは、ある研究が「科学的である」ためには、科学の論理としての「問題の明示」「仮説の提示」「仮説の真偽の、実験による検証」「結果の公表」という一連の研究過程が前提になるということである。なされた研究がそのどこに位置付くのかを明確に意識し、未知の問題に迫っていく、そのような研究行動の積み重ねの中から、スポーツ学に固有の概念、用語、方法などが姿を現して来ると考えられるのである。

視点を変えて、新しい学問領域への期待という点から言えば、既存の学問領域の方法(論)による研究テーマの設定という枠組ではなく、スポーツ現象に関する「未知の問題の提示」「仮説の提示=仮説の有効性への考察」という局面への強い問題意識や動機が必要とされよう。未解決の問題を明示すること、それに対する最も可能と思われる解決法を提示することは、科学的研究における基礎的で重要な研究過程であることを確認しなければならない。これらを基盤として「新しい実験方法の模索、仮説検証の方法的工夫」がより深く追求されるようになると考えられるのである。こうした考えをベースに、本研究で述べてきた「スポーツ学」への取り組みの為の観点をまとめてみたい。

- 1) スポーツを巡る様々な認識レベルを確認しつつ、問題事態を研究する体制が必要になる。特に、「仮説的」原因-結果関係認識、「要素的」原因-結果関係認識のレベルを基礎とした、「因果的」原

因-結果関係認識という視点が重要である。今日、「スポーツ科学」といわれる研究の大部分においてこの視点は重要な意味を持っている。「こうすれば必ずこうなる」といった「必然的・因果的」レベルの研究成果がどのくらいあるのだろうか。筆者らは多くの研究発表の大部分が「仮説的」「要素的」レベルの研究成果であり、事実の数量的処理に際し、この点を強く意識する必要があると考えている。しかし、このことは科学的研究に対し否定的な評価を意味しているわけではない。研究者自らが、自らの研究成果をどのようなものとして捉えるのか、又、当該の学会全体としてその研究成果をどう位置づけるのかという問題であり、それらを明確に意識することを科学の論理として主張するのである。

[(2-5) 認識内容と認識レベル]

- 2) スポーツといわれる人間的行為を、どのような枠組みで捉えるのかを論理的に明確にしつつ研究する必要がある。その際、五つの運動文化領域という視点は有効な視点となる。[(2-4) 運動文化の系統発生史的研究]
- 3) 個々の人間的行為において「スポーツ」という現象がどのように現れ、追求されていくのかを解明する必要がある。その際、「個体発生史における運動文化との関わり」が有力な視点となる。[(3) 個人的行為における文化的価値の衝突]
- 4) びわこ成蹊スポーツ大学における「スポーツ学」の探求のためには、上記三点への共通理解と、研究・教育体制への更なる検討、合意が必要である。

[(4) 「スポーツ学」の探求と「学校スポーツコース」…びわこ成蹊スポーツ大学における研究・教育体制と「スポーツ学」への取り組み]

「スポーツ学」は、多面的に展開されてい

る「スポーツ」に関する諸効果（心理的・生理的・社会的等々の）やそれらに関わる諸条件，又，将来への影響を明らかにする学問である。そのためには，「スポーツ学」が独立した学問領域として成立するためのスポーツ現象に関する統一的言語（概念・用語）や統一理論が必要である。これらの要請に対し，現段階の研究レベルは十分対応できるものとは言えない。具体例を挙げれば，「運動文化」という用語に対する共通認識の欠如，乳・幼児から老人に至るまでの，あるいはごく軽い負荷（例えば，腕を振る，挙げる等）から強い負荷（例えば，スポーツトレーニング）まで通用する共通の言語や理論がないことなどである。こうした問題に対する研究は，人間の運動の全てに関わる学としての「人間の運

動学」と重なるかもしれない。しかし，それらは「スポーツ」という運動行動を抜きにしては手に入れることも，知ることも出来ない世界であることは間違いない。ここに「スポーツ学」として，それを意識的に追求する意味と価値があると考えるのである。

5 引用・参考文献

- 江刺幸政（1999）体育教育における教材構成の理論的基礎 創文企画 pp.68-79, 212-218
- 江刺幸政（2002）教科目標設定における二つの関係と統一に関する研究 教育学研究紀要 第47巻二部 pp.238-242
- 藤井英嘉，稲垣正浩共著（2006）スポーツ科学からスポーツ学へ（スポーツ学選書；19） 叢文社